

シベリウスの創作の源

作家の村上春樹さんに「シベリウスとカリウスマキを訪ねて」という紀行文風のエッセイがある。村上さんはフィンランドで、首都のヘルシンキから 40 キロほど離れた森の中にあるアイノラ荘を訪れた。ここは、シベリウスが 38 歳から 91 歳で亡くなるまで暮らした家で、「アイノラ」というのは彼の妻アイノの名に因んで名付けられた。

村上さんがここで注目したのは水道だった。シベリウスは終生、アイノラ荘の母屋に水道管を設置しなかった。だから、トイレに行くにも、炊事用の水を調達するにも、屋外に出かけなければならなかった。水道を引かなかったのは、彼が水道管を流れる水の音を嫌ったからだ。

フィンランドの冬は寒くて暗い。アイノラ荘のあたりは北緯 63 度だから、日本よりもずっと北にある（北海道の宗谷岬が北緯 45 度）。冬には日中でも気温は氷点下で、午後 3 時すぎには日が沈む。村上さんは書いていないが、実は、アイノラ荘には最初の 14 年間は電気も来ていなかった。シベリウスの妻と 5 人の娘たちにとって、アイノラ荘での生活はずいぶん不便であったろう。娘たちは皆、バイオリンなどの楽器演奏に親しんでいたが、シベリウスは、自分が作曲をしているときに娘たちが楽器の練習をするのを禁じた。シベリウスはアイノラ荘で、異常とも言えるほど静寂を追求して作曲した。

村上さんはエッセイの中で、妻や娘たちが、シベリウスが亡くなったあと次のように会話をしたのではないかと想像している。「ああ、これでやっとうちの中に水洗トイレができる。お父さんが亡くなったのは残念だけど、正直言ってちょっとほっとしたわね」「まあ、お父さんもむずかしい人だったからね」「ほんとね。でもなんだか淋しいようでもあるわ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

アイノラ荘にやってくる前のシベリウスの主な活動舞台はヘルシンキだった。シベリウスは、1889 年にヘルシンキ音楽院を卒業して作曲家としての道を歩み出したが、彼の作曲活動には、当時の政治状況が大きな影響を与えた。

そのころ、フィンランドはロシアに支配されていた。フィンランド大公国として独立国に近い自由を得ていたのが、シベリウスがヘルシンキ音楽院を卒業した頃、徐々にロシアによるフィンランドへの締め付けが強まりだした。ロシア皇帝ニコライ 2 世はフィンランドの「ロシア化」政策を本格化し、フィンランド軍のロシア軍への統合、フィンランド独自の切手の発行禁止、そしてついに 1899 年 2 月には、フィンラ

ンドに關係する法律は今後ロシアで制定できるとする「2月宣言」を發布した。

フィンランドの人々はこのロシア化政策に抵抗した。武器を使って抵抗しようとしたグループがいた一方で、多くの人々は平和的に抵抗しようとした。特に芸術家たちはフィンランド文化を顕示するのが自分たちの任務だと考えた。

右の絵は、そうした芸術家たちの会合の様子を描いた絵である。描いたのは、後にフィンランドの代表的な画家と言われるようになるアクセリ・ガッレン＝カッレラである。彼自身が絵の中に登場しており、左端に立っている。ガッレン＝カッレラの下で、笑っているのか泣いているのかわけのわからない顔つきをしているのはオスカル・メリカントという音楽家兼評論家、真ん中が作曲家のロベルト・カヤウス、そして右端がシベリウスである。



この絵が描かれた 1894 年、シベリウスもガッレン＝カッレラも 29 歳であった。彼らはこの会合を最初は **Probleemi**、英語のプロブレム、つまり「問題」と呼び、後に「シンポジウム」と呼ぶようになった。「シンポジウム」という言葉は、今では研究発表会や討論会の意味で使われるが、もともとはギリシア語の「シンポジオン」に由来し、男たちが酒を飲みながら議論をすることであった。

「シンポジウム」と題された絵には別バージョンがあり、それが右の絵である。なぜ 2 つのバージョンが描かれたのかよく分からないが、最初に描かれた上の絵の左端には、女性スフィンクスの像が描かれていたらしいのだが、ガッレン＝カッレラがあとでその部分を切り取ってしまった（少しだけ足の部分が見える）。そして 2 番目に描かれた下の絵では、それがエジプト風の羽らしきものに代わっている。



出典：[https://fi.wikipedia.org/wiki/Symposium_\(Akseli_Gallen-Kallela\)](https://fi.wikipedia.org/wiki/Symposium_(Akseli_Gallen-Kallela)) 上の絵も同様

私は上の絵の方が好きである。下の絵だけを見ると、シベリウスの表情は、深刻で思いつめているようにも見えるのだが、上の絵のシベリウスは明らかに酔っ払っている。上の絵を見てから下の絵を見ると、シベリウスは酩酊して目が据わっているよ

うにも見える。

彼らは連日連夜、ヘルシンキ市内のレストランでシンポジウムの会合を開き、酒を飲みながら議論した。シベリウスは特に大酒飲みだった。ガッレン＝カッレラの「シンポジウム」の絵が世の中に公表されると、彼らは世間から非難をあびた。それは、フィンランドではアルコール中毒が大きな社会問題だったからだ。「禁酒法」というとアメリカが有名だが、フィンランドではアメリカより1年早く1919年から1932年まで「禁酒令」が施行されたという歴史を持つ。

★★★★★☆☆★★☆☆★★☆☆★★☆☆

シベリウスは、新婚であったにもかかわらず、シンポジウムだけでなく様々な飲み会に出かけていった。彼はアルコールだけでなく食べ物や衣類にも贅沢であったので、常に金に困っていた。アイノラ荘への引っ越しは、こうした肉体にも家計にも良くないヘルシンキでの生活からシベリウスを引き離すために、妻アイノがシベリウスを説得して実現した。

アイノラ荘に移ってから、シベリウスは交響曲を第3番から第7番まで作曲した。村上春樹さんが「個人的には5番を一番愛好している」というように、それぞれの交響曲にファンがいる。しかし、圧倒的に人気があるのは2番である。名古屋大学交響楽団もこれまでシベリウスの交響曲を何度か演奏したが、いつも2番であった。

交響曲第2番は、アイノラ荘に引っ越す2年前の1902年に完成した。そのほか、シベリウスの楽曲の中で特に人気のある曲目－フィンランディア、バイオリン協奏曲、カレリア組曲、トゥオネラの白鳥、これらはすべてヘルシンキ時代に作曲された。これらの名曲の創作の源になったのは、フィンランドが独立に向かう時代背景、シンポジウムの仲間たち、そして大量の飲酒とそれを可能にした彼の若さにあったのだと思う。

([名古屋大学交響楽団第116回定期演奏会パンフレット](#))